

長唄における伝統の継承と革新 松永鉄九郎氏に聞く

三小田美稲子

国士館大学



「伝の会」

長唄は歌舞伎の伴奏音楽として発展した。長唄は謡曲、浄瑠璃、地歌、民謡などのいろいろなジャンルの影響を受けたため、その音楽性は多様であり、三味線音楽の集大成と言われている。

長唄の編成は、小鼓、大鼓、笛などで構成されるいわゆる「お囃子」がつくことが正式であるが、お囃子が伴わない場合でも複数の唄と三味線による賑やかな演奏となる。ところが、ここで紹介する「伝の会」は、三味線二本だけで長唄の新しい魅力を引き出しているのである。

「伝の会」は、杵屋邦寿氏と松永鉄九郎氏によって平成元年に結成されたユニットである。「古き良き長唄の魅力」を今に伝え、長唄



を知らない人々にもその楽しさを伝えたい」という思いから作られ、国内外で精力的に活動しているという。「伝の会」の活動は「ライブ」と称し、その名称から予想される通りの他の邦楽の演奏とは趣の異なったものになっている。あくまでも伝統的な手法を扱いながら、それを身近なものにするためのさまざまな工夫が試みられている。もともと解説の入った邦楽の演奏は珍しいと聞くと、それが、楽しいパフォーマンスとなっているところがさらに新しい。(写真上)

長唄三味線ライブ？

では、長唄三味線ライブがどのようなものか。ある日のライブの様相を紹介しよう。

会場は浜松楽器博物館。長唄の講演と演奏の会と聞けば堅苦しい会を想像するが、鉄九郎氏と邦寿氏が話し出したとたん、あたりの空気は一変する。挨拶代わりの演奏に続いて、自己紹

介があり、そして、三味線の構造、楽器の起り、種類、性質とメンテナンスについてなどの楽器に関する説明という内容なのに、会場にはずっと笑い声が響いているのである。

しかも基本的な説明に終わらず、三味線の場合は現在ほとんど外国産であること、三味線の皮はゆるんだり、破れたりしやすく、割と頻繁に張り替えなければならぬこと、棹も減ってくるたびに削らなければならず、ヴァイオリンのように永久に演奏できる楽器ではないことなど通り一遍の説明では聞けないことが二人の楽しく乗りの良い掛け合いで語られる。聴衆はずっと笑っているうちに三味線通になっているというわけだ。

話は長唄の種類に移り、出囃子、舞踊、黒御簾の音楽の違いについて実演を伴った説明となった。歌舞伎における出囃子とは、演者が舞台に出て演奏することを言うが、例として「勧進帳」が演奏されたが、たいへん活気に満ちた演奏で、三味線二本だけでこんなにも心はやる音楽が作られることに驚かされたのである。

舞踊では「娘道成寺」を例に、舞に合わせて演奏するためにアドリブが用いられているという話が出た。邦楽にもアドリブという手法があることを強調していたが、確かに長唄は、定められた音楽や形の中で演奏しなければ



ばならないというイメージが強いだけに耳新しい事実であった。ジャズにおけるアドリブがエネルギーを生み出すように、「伝の会」の二人の演奏も絶妙のアンサンブルを作り出していた。

黒御簾の音楽に移ると、その説明のためにいろいろな場面の黒御簾の音楽を物語のようにつなぎ合わせた演奏がともおもしろい。黒御簾の音楽とは、舞台の下手にある小さ

な部屋で演奏される音楽のことで、歌舞伎の進行に伴って効果音のような役目をする音楽である。黒御簾の音楽には、特定の情景や自然を表す音楽が無数にある。川の流れる音、虫の声、静かさの表現、走る音(それも武士、町人、女では異なる)、戦いなどを表す音楽など、長い時間をかけて精査されてきたせいだろうか、やはり、日本人としての共通の感覚が存在するのだろうか、なるほどとも思う

し、そのように聞こえるから不思議だ。長唄ライブはこのように、軽妙なおしゃべりと巧みな演奏で長唄の魅力を存分に伝える試みである。豊かな知識を解きほぐした解説、観客の興味を引きそうな話題、西洋の音楽との比較など、解説のテクニクにも舌を巻いた。

では、なぜこのような活動を行おうと思ったのか、そこに何を表現しようとしているのか。そこには伝統の継承と革新という問題がどのように関わるのか、鉄九郎氏に直接お話を伺うことができた。

松永鉄九郎氏とは

ここで松永鉄九郎氏(写真上)の経歴を紹介しておきたい。鉄九郎氏は中学校よりバンド活動をはじめ、日本大学法学部の学生になるとバンド活動にますますのめりこみ、一時はバンドで世に出ることも考えた。しかし、大学三年の時に日本舞踊を習っていた母に勧められて、長唄松永流、松永鉄十郎師の内弟子となった。昭和五十八年に松永鉄九郎の名を許され、現在は三味線方として演奏と後進の指導に当たっている。また、ドラマや映画での作詞・作曲や三味線指導にも関わり、映画に出演した。



おもしろいのは三味線を始めたきっかけである。バンド活動一筋だった悩める青年が、いくらバンド活動に先を見いだせないからといって、母親のアドバイスで全く未知の世界に飛び込むだろうか。「もともと興味があつたのではないのか?」「もつとはっきりした理由があるのではないのか」という問いに、そんなことはなかったし、なぜ飛び込んだのかも自分ではよくわからないという。ただ単

に三味線を習ってみるのではなく、内弟子になることに非常に魅力を感じたという。何かを一から徹底的に学ぶこと、それも古典芸能を一から学ぶことにあこがれた。内弟子になったとたん舞台を経験することになった。邦楽では実践しながら学ばらし。そこで、舞台とは何かを身をもって体験し、演奏者の息遣いを感じながら学ぶことができる。これは、演奏者の訓練としては最も

理想的な形である。住み込みで師匠の下で、常に実践しながら学ぶ、内弟子という制度は演奏だけでなく、人生のすべてを学ぶことのできる場所でもあった。

それまで弾き続けてきたギターを同族の絃楽器である三味線に持ち替えたわけだが、ここに何か関係があったのではないのかという問いにも、まったくないと答えて返ってきた。三味線を習い初めたころは、それまでのギターの経験がむしろ邪魔になったという。

鉄九郎氏と長唄との出会いは突然のものであったが、しかし、彼の何かを表現したいという欲求には合致したように思う。幼いころから邦楽の世界にいて自然とそこに入ったという経歴の演奏家が大半である中で、鉄九郎氏のような経歴は珍しい。そんな背景が彼のユニークな活動を生み出したのだろう。

映画に関わって

鉄九郎氏のユニークな活動は、いろいろな人を引き付けた。ヨーロッパでの活動も増えたことなどから、さまざまなジャンルや楽器との共演も経験した。洋楽・バンドとの共演、和太鼓や津軽三味線との共演など多岐にわたる。しかし、鉄九郎氏が最も自分に向いていると感じたのは、映画の音楽を担当したとき



だと語った。場面や雰囲気にあさわしい音楽を選ぶという、音楽監督のような仕事である。場面・場面にふさわしい音楽を既存の音楽から選ぶだけでなく、時には作曲したりもする。ここで問われるのはどれだけ長唄に用いられているメロディを知っているのか、つまり、黒御簾の音楽を知っているか、どれだけ知識があるのかということである。

先に黒御簾の音楽については説明したが、ここで演奏される音楽には、特定の自然現象や背景、雰囲気、人の職業、地位、動きなどに定められた音楽が存在する。その中から歌舞伎のある場面にふさわしい音楽が選択されて黒御簾の中で演奏される。黒御簾の音楽に対する豊富な知識が、映画にあさわしい音楽を選ぶ際に生かされたのである。さらに、長唄に精通したからこそ新しいメロディを作ることができるようになったのである。

ここで鉄九郎氏は「守破離」ということを口にした。

守破離

「守破離」とは、武道を学ぶ際に用いられることばである。武道論によると「守」は、師についてその流儀を習い、その流儀を守って精進すること、「破」は、今までに身につけ



た教えからさらに進めて他流を研究すること、「離」は、自己の研究を集成し、独自の境地を拓いて一流を編み出すことだと説明される。

まずは師について徹底的に学ぶ。それがたぐさんのメロディを持ち、知識を得ることにつながる。黒御簾の音楽はある音楽が川を表すのだという知識がなければ聴衆にはわからないように思う。しかし、鉄九郎氏は言う。川の流れたと連想して演奏すれば必ず通じる。要は、本気でそう思って演奏するかどうかだという。そういう表現ができるようになるために勉強をし続けるのであり、知識を得たといつて安心してはいけない。

しかし、徹底的に学んだら離れなければならぬ。だからこそ新しいメロディを作ることができるようになった。そこには、離れた

としても小手先のものではない、本物が作れるとの確信があったからである。芸は死ぬまで勉強である。しかし、勉強とは時として、受け身の状態で安住することをよしとしてしまい、自分で考えることをやめてしまう。芸に携わる人たちは勉強を続けながらも、常に完成形を提示しなければならないし、そのためには自分で考えなければならぬ。そう語る鉄九郎氏に本物の人だけが持つ矜持を見たのである。

ショービジネスとしての歌舞伎

歌舞伎や長唄は、なじみのない人には古典芸能であり、連綿と続いてきた伝統を守り続けている牙城に見える。しかし、もともと長唄とは庶民の音楽であり、当時のヒット曲で

あり、現在残っている曲はオリコン一位の曲だという指摘は目からうろこが落ちる思いだった。歌舞伎も当時の事件などが取り入れられ、ヒットすることを想定して作り上げられたショービジネスである。そこには常に、伝承されてきたものと伝統とは異なるものが存在した。それは、観客からのニーズに因應することによって選択されてきた。

芸は継承されてきたものを学ぶことから始まる。徹底的に学んだ後には、独自性が要求され、それが革新へとつながる。歌舞伎とその伴奏音楽として発達した長唄は、そのあり様に革新を内包しているが、徹底的に精進し、学んだからこそ革新を生むことができるのである。

鉄九郎氏は「芸に携わる人たちは勉強を続けながらも、常に完成形を提示しなければならないし、そのためには自分で考えなければならない」と語った。自分で考えた結果として生まれたのが「伝の会」であり、たぶんそこに鉄九郎氏が求めているものが見いだせるであろう。「伝の会」の公演を楽しんでいる観客を見ると、重要なのは古典芸能であるかどうかではなく、確固とした技術や表現に支えられた真のエンターテインメントなのかどうかなのだと感じた。